opusdei.org

聖ホセマリアの生涯 -4

ホセマリアの初ミサは、聖週間(キリストの死去を記念力に当たっており、かっために捧げられものであったため、招待客も少れました。

2020/09/20

聖ホセマリアは司祭になる直前に父を亡くしました。すでに苦しい生活 を送っていた一家は、さらに貧しく

このような孤独の中でホセマリアは 1925年3月28日に司祭に叙階 されました。普通、新司祭はゆかな大勢の親族や友と招話で 初ませるのうちに祝われるもませんであるといったのである。 聖週間 に当たっておりである。 というないであるというない、招待客も少なく、寂しい雰囲気

の中で祝われました。ホセマリアが 選んだ場所は、神学生時代によく祈 りに行ったピラールの聖母像が見守 る小聖堂でした。それは大聖堂の中 にあり、ミサの間も周囲にはたえず 大勢の人が行き来していました。

ドローレス夫人は喪服で参列しました。息子の晴れ姿を見ずに先立った夫と一緒に忍んだ苦労を思いだしてか、「大粒の涙をひっきりなしに流し、時には失神するかに見えた」と参列者の一人は語っています。

新司祭は、ミサの中で自分が聖別した聖体をまず母親に授けることを楽しみにしていました。しかし、聖体拝領が始まろうとしたとき、一人レス見知らぬ女性が進み出てドロー人に聖夫人の前に跪いたので、その人に聖体を与えねばなりませんでした。聖ホセマリアは、楽しいお祝いのとなはいつも、神様が自分に何か小さな

辛いことを与えられると言っていま したが、今回もそうなったのです。

その晩、ドローレス夫人はお祝いに 来てくれた一人の従兄弟とカルメン の友人を家にさそい、ささやかな料 理でもてなしました。新司祭は辞令 を受け取りましたが、それはまたし ても辛いものでした。

3月31日、村に到着。宿泊場所は 親切な村人の家。早速教会に行って みると、作りは立派でしたが、中は 埃にまみれていました。それで翌朝 のミサのために教会内部の掃除に取 りかかります。長い行事が続く聖週 間と復活祭が終わり一息つくと、司 牧の計画を立てました。まずは村人 を知ること。わずかの間に村にいた 200家族を全部訪問しました。そ して、寝床の病人を訪れ、告解を聞 き、望む人には聖体を持って行く。 また、大人も子どもも教義の知識が ないのを見て要理教育に励みまし た。こうして熱心に司牧に励みまし たが、その熱心さをからかう村人も いました。

神父の下宿には子どもが一人いました。その子は羊の群れを連れて朝早く家を出て日が暮れるまで家に帰ってきません。神父はかわいそうに教会の教えの手ほどきをした。少し勉強が進ることにしました。少しかったのかったがして「もし大金持ちになったう、何がしたい」と尋ねました。す

ると、「金持ちになるって、どうこと」と聞き返します。そからことがあるって、どうでを聞き返します。それはたくさんのお金だよったとだったがあると、どうでもしているのは神様だら、なちられるのはなちられるのはない。こんなちられるのはならによって、なちられるのはならによって、なちられるのだして、なることを教えておられるのと。

村の教会の世話役の息子は、神父のよく仕事を手伝ったりして、仲良のなったようです。聖ホセマリたとったようで調査が行われたと言い話したと言いおられたみないませんが、エスクリボでよが、エスクリボでよが、エスクリボでよが、エスクリボではというです。神父様はとこで裏表なたのはでした。ここにおられたのは

短い間でしたが、私は神父様がとても好きになり、ここを去られたときは本当に寂しく思いました」。神父は5月18日にサラゴサに帰りました。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/seijosemaria-4/(2025/12/14)